富士山かぐや姫ミュージアム　秋のテーマ展
令和３年度 沼津市・富士市連携埋蔵文化財活用特別展示事業

愛鷹山と生きる
あしたかやまといきる

原始・古代の生存戦略

展示解説図像集

愛鷹山周辺には、旧石器時代から断続的に遺跡が見つかっています。なぜ人々はそこに住むようになったのでしょうか。そして、どのような生活をしていたのでしょうか。

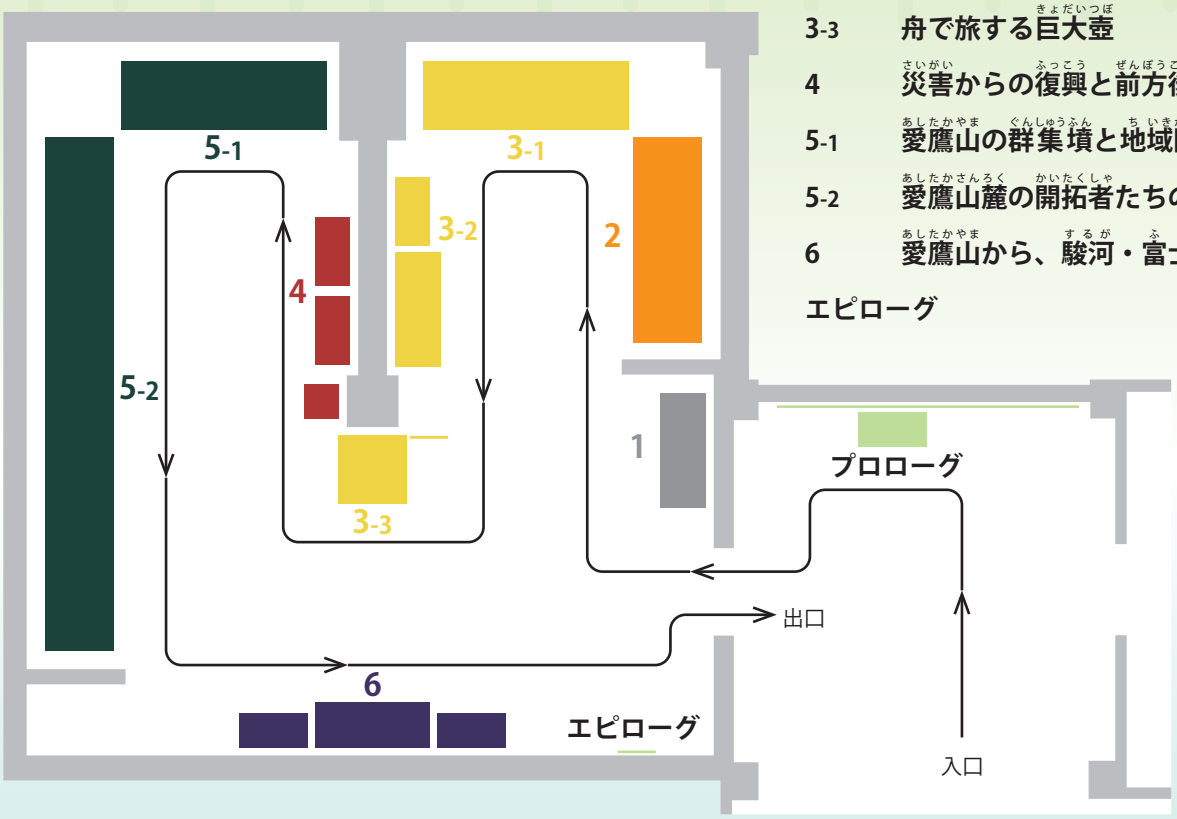
今回は、静岡県東部の皆さんにとって身近な山である愛鷹山周辺の遺跡に焦点をあて、発掘された資料から見えてくる旧石器時代から奈良時代の人々の生活の知恵を紹介します。

富士山かぐや姫ミュージアム
令和３年９月18日（土）～11月28日（日）

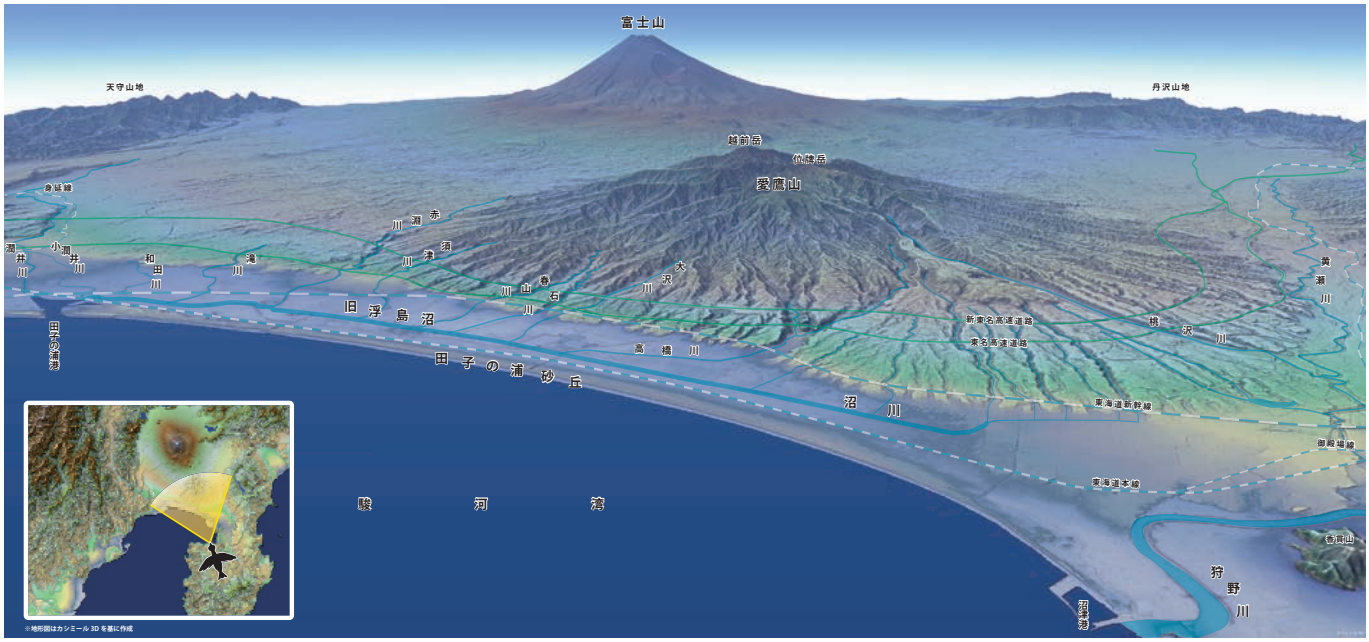
展示ゾーン

プロローグ	～愛鷹山と周辺環境～	P1
1	山を駆け、穴を掘る旧石器人	P2
2	場所が変われば、道具もかわる	P3
3-1	遺跡をトリまく水とのかかわり	P4
3-2	リーダーの出現	P5
3-3	舟で旅する巨大壺	P7
4	災害からの復興と前方後円墳	P8
5-1	愛鷹山の群集墳と地域開発	P10
5-2	愛鷹山麓の開拓者たちの素顔	P12
6	愛鷹山から、駿河・富士へ	P17
エピローグ		P20

会場案内図｜展示室５



プロローグ　～愛鷹山と周辺環境～



愛鷹山周辺の地形　※地形図はカシミール 3D を基に作成

愛鷹山と周辺環境

愛鷹山は富士市の東部から、沼津市・裾野市・長泉町の３市１町にまたがる９つの峰が連なる火山です。

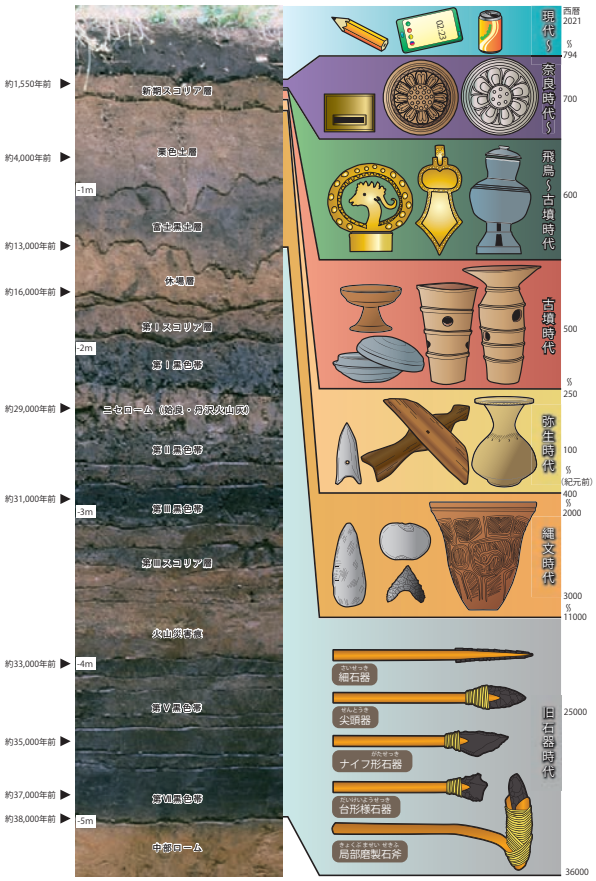
愛鷹山南麓には、富士川などの砂礫が堆積した海岸砂丘と山裾との間に広がるラグーンに、山から南流する須津川などが運んだ土砂が注ぎこまれて形成された浮島ヶ原低地が広がっています。愛鷹山中には、クリやクヌギなどが生育し、山や河川、浮島ヶ原低地、駿河湾に生息する豊富な動植物は、人々の生活を様々な形で支えてきました。

愛鷹山の土層

愛鷹山南麓に堆積する愛鷹ローム層は、富士山から噴出したスコリアと、草木が腐って堆積した黒色土で構成されている土層です。

土層から発見された植物の分析結果から、愛鷹山周辺は他の地域に比べて比較的温暖であったことがわかっています。

土層ごとに各時代の遺物が出土していて、愛鷹第Ⅶ黒色帯（右図参照）からは、愛鷹山に最初に住みだした人々が使った局部磨製石斧などの石器が見つかっています。



愛鷹山の土層断面図と時代の移り変わり
（植出北Ⅱ遺跡 / 沼津市）画像提供：沼津市教育委員会

1　山を駆け、穴を掘る旧石器人

旧石器時代の愛鷹山における石器利用

この時代の遺跡は、標高 100 ～ 200 m前後の丘陵上に多く分布しています。その中でも最も古い遺跡は、３万８千年前の井出丸山遺跡（沼津市）で、人々は黒曜石製石器などを用いて生活していました。愛鷹山から出土した石器を層ごとに見ていくと、初期に局部磨製石斧や台形様石器を使用する時期があり、時代が新しくなるにつれ、ナイフ形石器、尖頭器、細石器の順序で石器が出土しているため、人々は、生活に合わせて道具を増やしつつ変化させてきたことがわかります。石器の素材となる石は、周辺のものを用いる場合と遠隔地の石材を用いることがあります。ナイフ形石器などの剥片石器の主要石材となる黒曜石は、伊豆・箱根周辺産のものを用いる一方で、信州系黒曜石を多用する時期もあり、遠方から素材を獲得し、石器を製作していたことが伺えます。

石器の使用方法

（右）旧石器時代の陥し穴（石井礼子氏 画）
（国立歴史民俗博物館提供）

陥し穴の使用

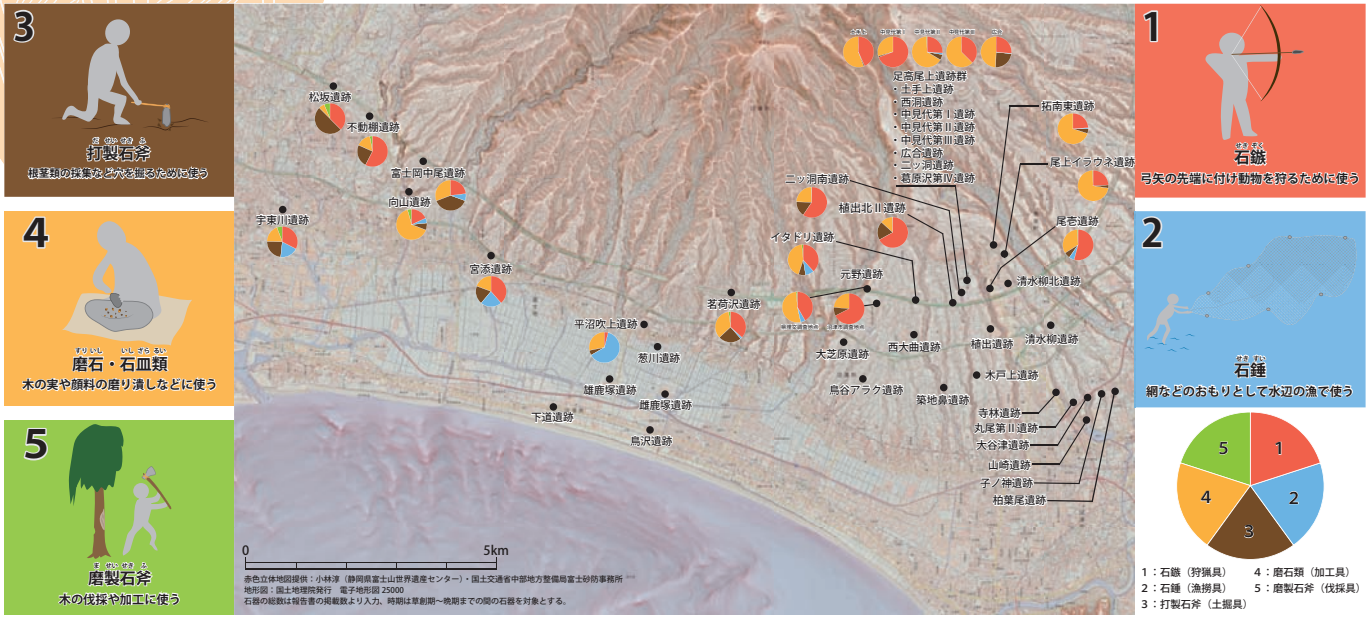
愛鷹山麓とその東側の箱根山麓では、31,000 年前頃に、山麓の尾根上に穴を列状に掘る陥し穴が作られました。陥し穴は、径が 1.3 m前後、深さは 1.4 m前後あり、これまでに愛鷹山周辺から 143 基程度が確認されています。人々は、陥し穴を設置するために、一定期間同じ場所に留まり、固い地層を掘り抜く作業をしました。陥し穴の利用には、定期的な穴の確認・補修や、獲物の回収などの作業が伴い、移動しながら生活する旧石器時代としては、比較的長い期間、猟場に留まる必要がでてきます。気候変動が激しかった旧石器時代において、愛鷹山は、温暖で気温の変化が比較的ゆるやかであったといわれ、その環境は滞在に適したものであったと考えられます。陥し穴は、旧石器時代の愛鷹山に生きた人々の生存戦略のひとつといえます。

旧石器時代の陥し穴列（富士石遺跡 / 長泉町）
（静岡県埋蔵文化財センター提供）

陥し穴断面図（富士石遺跡 / 長泉町）
（静岡県埋蔵文化財センター提供）

2　場所が変われば、道具もかわる

縄文時代に入ると、人々は住居を用いて定住をするようになり、多様な石器がまとまって出土するようになります。愛鷹山の縄文時代遺跡は、時期ごとに遺跡数に偏りがあり、早期（約 10000 年前）～前期（約 8000 年前）の遺跡が多い傾向にあり、旧石器時代と同様に、愛鷹山南麓の山間部に多く立地しています。前期頃には、山間部だけでなく、浮島沼周辺にも集落が作られるようになります。遺跡ごとの石器の出土数量をみてみると、山間部に立地する元野遺跡（沼津市）においては狩猟具である石鏃や、山芋などの掘り出しに使われる打製石斧、ドングリなどの加工に使用される磨石類の出土が多い一方で、浮島沼近くに立地する平沼吹上遺跡（沼津市）においては、漁撈具の石錘が圧倒的な割合を占めます。集落の周辺環境に合わせ、道具を変えながら生活していた姿が見えてきます。



赤色立体地図提供：小林淳（静岡県富士山世界遺産センター）・国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所
地形図：国土地理院発行　電子地形図 25000
石器の総数は報告書の掲載数より入力、時期は草創期～晩期までの間の石器を対象とする。

愛鷹山の縄文遺跡と道具の数々

縄文土器と竪穴住居のある生活

縄文時代の特徴的な遺物として縄文土器があります。土器で煮炊きが行えるようになり、木の実などを効率的に食べられるようになった他、ものの貯蔵や運搬など多岐に使用されました。縄文時代に入り、人々は定住を始めましたが、それに伴い、持ち運びを想定しない石器（磨石・石皿類）などの利用も増えていきました。

縄文人の帰る家（竪穴住居址）
平沼吹上遺跡 / 沼津市（沼津市教育委員会提供）

ものをため込む土器（埋甕）
宇東川遺跡 / 富士市

3-1　遺跡をトリまく水とのかかわり

雌鹿塚遺跡

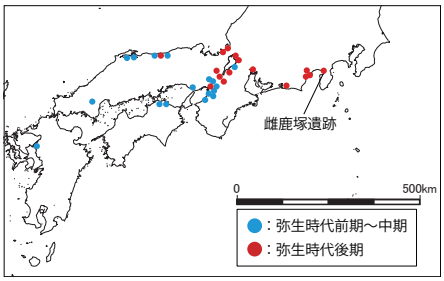
雌鹿塚遺跡は、沼津市原に所在する弥生時代中期後半～後期の遺跡です。遺跡周辺の地形は微高地とそれを取り巻く低湿地からなっています。住居などは低湿地周辺に多く作られました。また、低湿地からは列状に杭を打った遺構や湧水遺構が見つかっていて、なんらかの作業を湿地でおこなっていたことがわかります。土壌の分析から、遺跡周辺はつねに水が溜まってはいないものの、部分的に浅瀬が広がっていたこともわかっています。この遺跡は、東海道周辺を描いた『東海道分間延絵図』からもわかるように、江戸時代後期でも沼地に浮かぶ島のような場所でした。遺跡に人が住んでいた時代も、この絵図にみられるような環境であったものと思われます。

雌鹿塚遺跡　全景　雌鹿塚遺跡 / 沼津市
（沼津市教育委員会提供）

五海道其外分間延絵図 並 見取絵図 東海道分間延絵図 13 巻之内 3（部分）　江戸時代後期
（東京国立博物館所蔵　Image: TNM Image Archives 提供）

実りを運ぶつばさ

雌鹿塚遺跡からは、東日本では珍しい鳥形木製品が、複数出土しています。鳥は『山城国風土記』などの文献に、魂を運ぶ運搬者や、農耕に関わる動物として記述されることがあり、鳥形木製品も、農耕に関わる祭祀などに用いられたのではないかと考えられています。遺跡からは、水田跡が検出されていないものの、農耕具である鍬鋤類や田下駄などの木製品が多く出土しており、水田農耕がおこなわれていたと思われます。安定した食料調達を目指し、水田農耕を取り入れ、生活を変化させていった人々の願いを、鳥形木製品などから垣間みることができます。



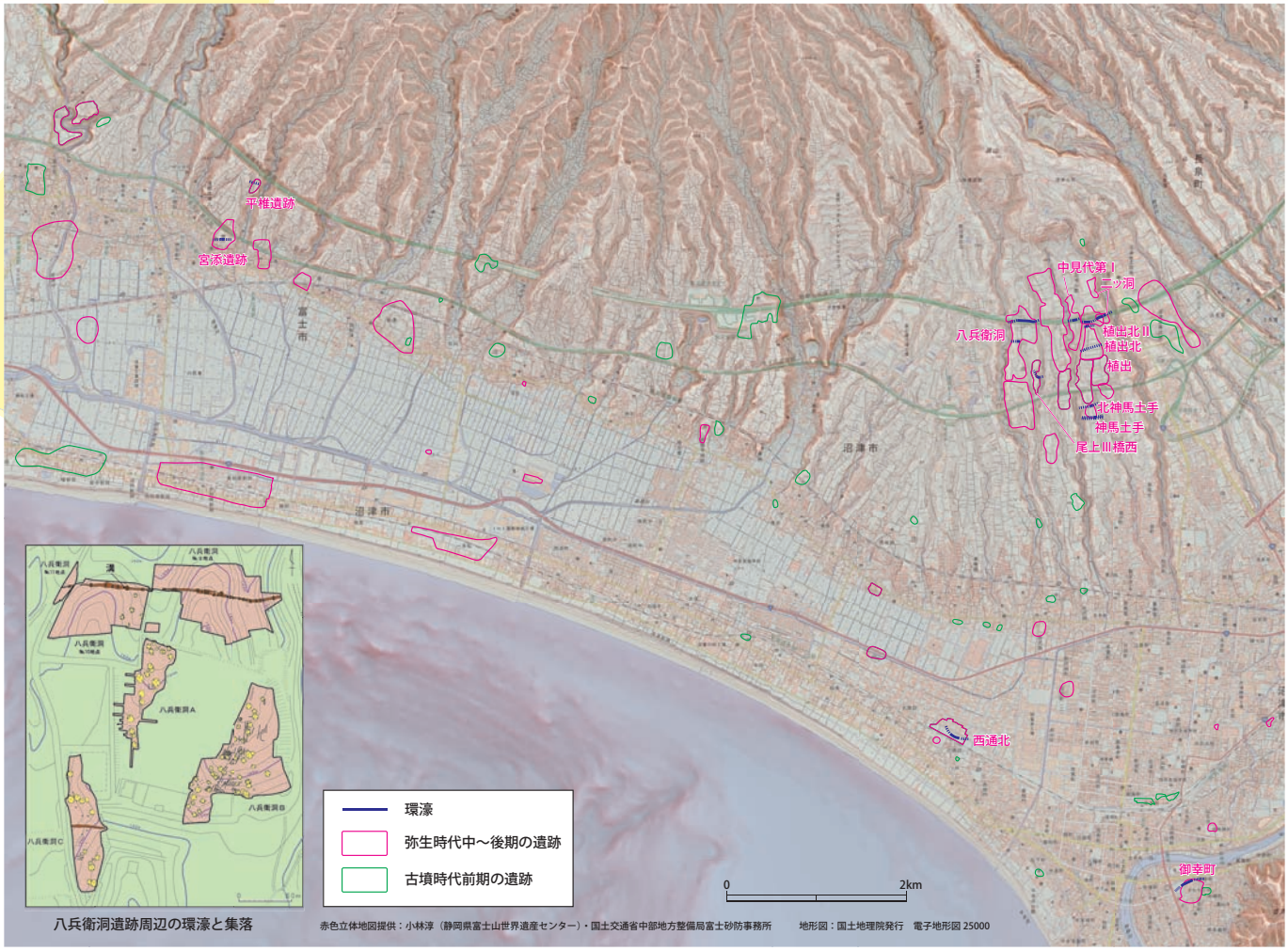
鳥形木製品の分布
（平山 2010、白石 2019 を参考に作成）

湿地帯での漁撈

雌鹿塚遺跡の出土石器をみると、漁撈網のおもりとして使用された有頭石錘や打欠石錘が約 20%を占めます。また、櫂や舟の形をした木製品も出土しており、舟を使っていた可能性が考えられます。雌鹿塚遺跡の人々が行った舟の使用や沼地での漁をする様子は、浮島沼周辺で近年までみられました。

川舟での移動（明治期）

3-2　リーダーの出現



赤色立体地図提供：小林淳（静岡県富士山世界遺産センター）・国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所
地形図：国土地理院発行　電子地形図 25000

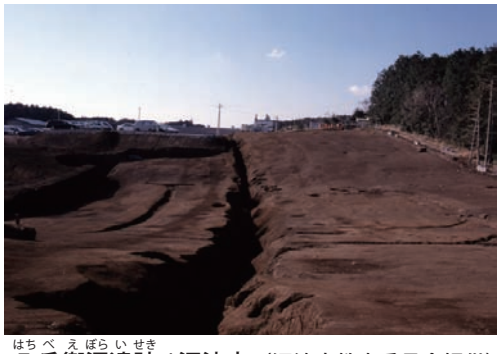
弥生時代中期～古墳時代の遺跡と環濠

愛鷹山を巡る環濠

弥生時代後期になると、生活圏が雌鹿塚遺跡などのある低地部と、高地性集落とよばれる丘陵中腹（標高 100 ～ 170 m付近）の大きく 2 つの地域に分かれるようになります。遺跡立地変化の要因としては、人口増加に伴う集落数の増加や、争乱等に伴う緊張関係といった社会的要因と、気候変動に伴う水面上昇や、自然災害など自然環境的要因などが指摘されています。

愛鷹山麓では、環濠の一部とみられる溝跡をもつ遺跡が確認されています。環濠設置の目的は、集落の防御や人々の団結、他集落との区画、生活のための陥し穴的利用などが考えられています。

集落規模の拡大や、争乱等による緊張関係のなかで、人々の団結が重要となることで、集落をまとめるリーダーが出現し、古墳時代の首長へとつながっていくものと思われます。



八兵衛洞遺跡 / 沼津市（沼津市教育委員会提供）

宮添遺跡 / 富士市

3-2　リーダーの出現

大陸の技術と戦いの姿

弥生時代後期になると、戦いに関わると考えられる遺物や、大陸由来の道具が愛鷹山からも出土するようになります。

大陸から伝わった青銅製の銅鏃は、鳥取県青谷上寺地遺跡で人骨に刺さった状態で見つかっているものと同じように、愛鷹山麓で出土したものも戦いに関わる道具である可能性があります。また、武器の可能性をもつものとしては有孔磨製石鏃も見つかっています。

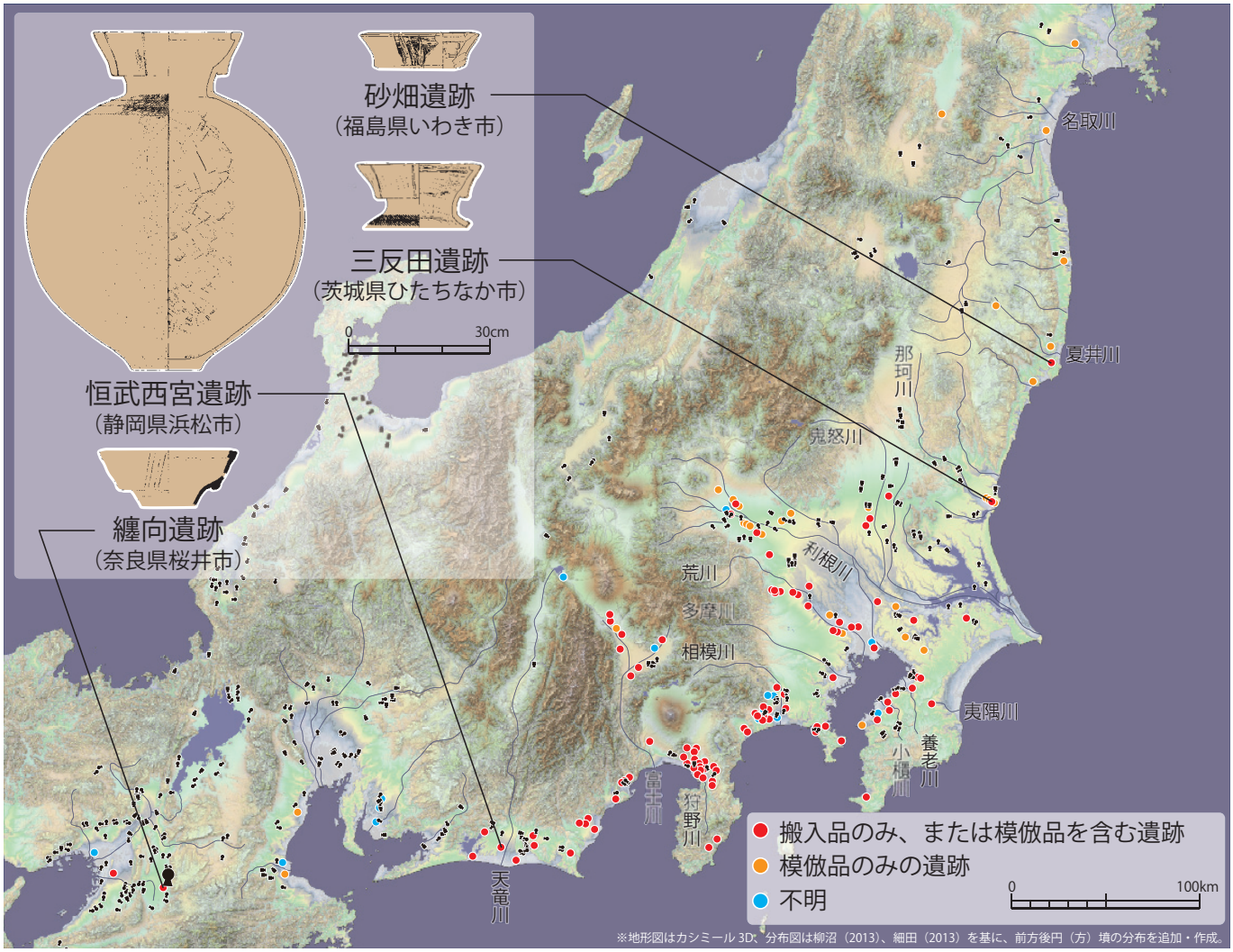
宮添遺跡から出土している銅釧は、腕輪として使用された道具です。縄文時代までは土や貝を素材としていたものが弥生時代に大陸から伝わった素材に変わっていったことがわかります。

愛鷹山麓からは、青銅製品や鉄製品、石器、農耕技術などの他に、大陸の技術として、ガラス勾玉の鋳型が発見されています。弥生時代のガラス勾玉鋳型は発見例が少なく、九州や大阪などの西日本以外では、植出北Ⅱ遺跡（沼津市）でしか見つかっていません。愛鷹山周辺では、弥生時代後期のガラス勾玉も出土しており、大陸から持ち込まれたガラスの技術が愛鷹山麓に持ち込まれ、交流の道具として利用されていったことが推測できます。

ガラス勾玉鋳型　植出北Ⅱ遺跡 / 沼津市
（沼津市教育委員会提供）

銅鏃の刺さった人骨　青谷上寺地遺跡 / 鳥取県鳥取市
（鳥取県とっとり弥生の王国推進課提供）

3-3　舟で旅する巨大壺



※地形図はカシミール 3D、分布図は柳沼（2013）、細田（2013）を基に、
前方後円（方）墳の分布を追加・作成。

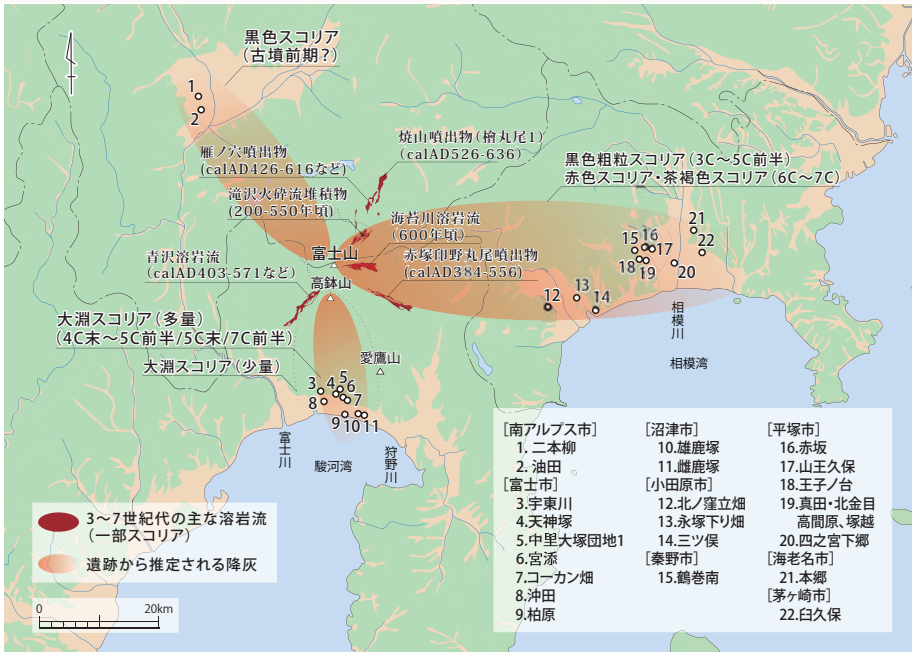
大型壺の出土分布と前期古墳の位置関係

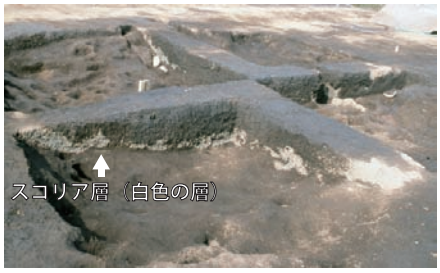
突帯文（土器面より一段高く盛り上げた線状や帯状の文様）を施し、二重の口縁をもつ大廓式土器と呼ばれる大型の壺が、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて東駿河で生産・使用されるようになり、関東各地や甲信地域に搬出されました。

大廓式大型壺の分布をみると、太平洋側に偏っており、類似品を含めると、西は大阪府、東は前期古墳の最北端である宮城県まで分布し、河川や海沿いに広がっています。そのことから大廓式土器が、古墳時代前期にはすでに東北方面へ広がっていたことがわかります。

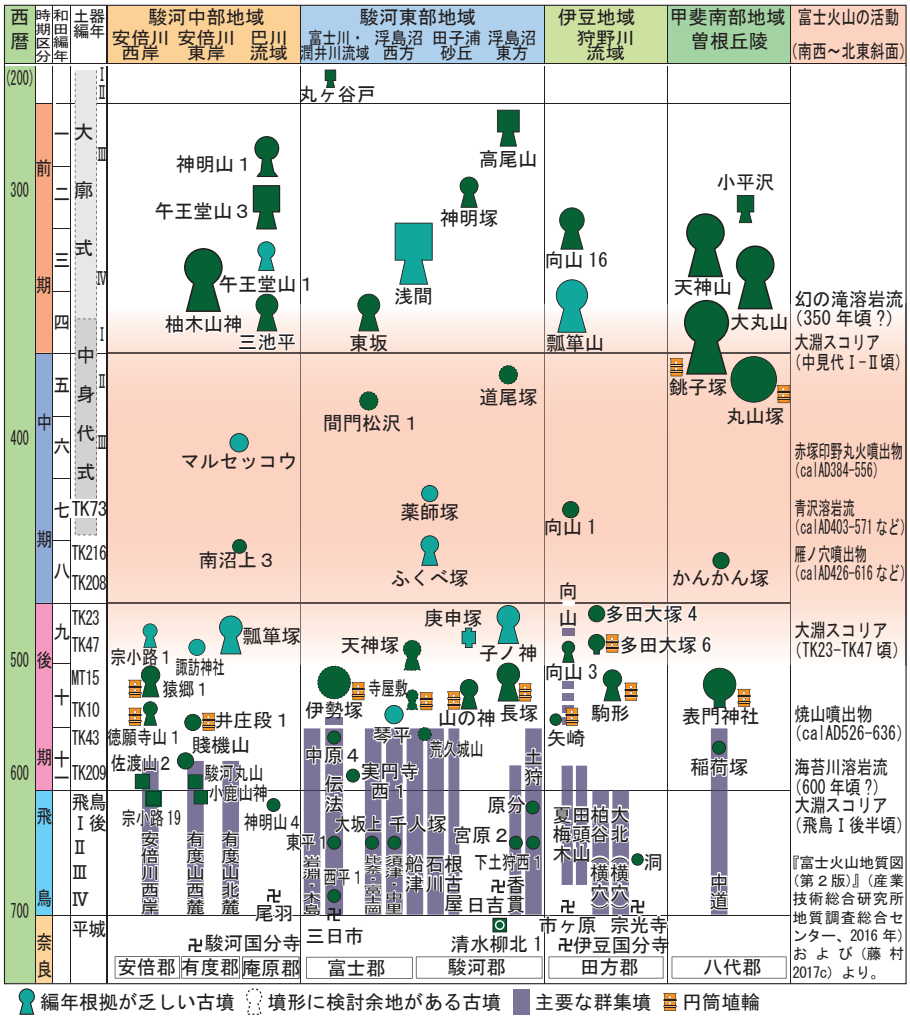
大廓式大型壺の用途は、古墳での祭祀用や稲籾などを舟で運ぶ容器としての使用が考えられています。弥生時代後期に誕生した東駿河地域のリーダーが稲籾を交渉の材料として、勢力の拡大や東国の開拓を後押しするために大廓式大型壺を用いたものとされています。

4　災害からの復興と前方後円墳





古墳時代の富士火山の活動と大淵スコリアが積もった竪穴住居（宮添遺跡／富士市）



富士山周辺地域における古墳の変遷

富士山の噴火と大淵スコリア

大淵スコリアとは、富士山南麓の側火山の噴火によって広範囲に降り積もった火山噴出物の一種です。

古墳時代を中心に３回以上噴出したことがわかっており、特に５世紀末頃の噴火によって埋没した集落が、愛鷹山南西麓から田子の浦砂丘上において広く見つかっています。

発掘調査によって、大粒のスコリアが 30cm 以上の厚さで降り積もった当時の被害状況が明らかになりました。

駿河地域周辺では、３世紀中頃から大型の首長墳が順調に築かれていたのが、４世紀後半から５世紀には、大型古墳は築造されなくなります。ちょうどこの頃、富士山の南麓や東麓に大規模な溶岩流が流れ出たほか、降灰被害も広がっていました。深刻な噴火災害により地域情勢が不安定であったため、統率力のある首長が現れなかった可能性があります。

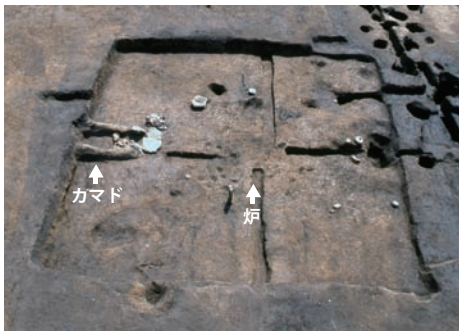
『富士火山地質図（第２版）』（産業技術総合研究所地質調査総合センター、2016 年）および（藤村 2017c）より。

4　災害からの復興と前方後円墳

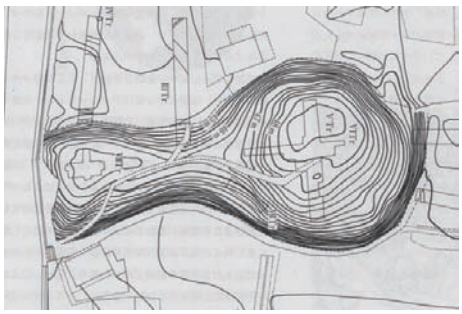
災害からの復興と前方後円墳

大淵スコリア噴火後の５世紀末頃には、富士山の噴火活動も収まりつつあり、各地で新興の中小首長による古墳築造が再開します。５世紀後半から６世紀前半には、低湿地を中心に新たな集落が誕生するほか、祭祀やカマド、須恵器、埴輪といった新来文物の受容が加速しており、その背景に、倭王権や関東の大首長からの支援があったと考えられています。地域側のもつ復興への要望に対し、王権側も災害を好機と捉え、適材適所に新たな復興・開発指導者を派遣または擁立することで、地域への影響力を高めていったのです。

新来の祭祀に使われた勾玉
（沢東Ａ遺跡 / 富士市）



カマドと炉の併用住居
（宮添遺跡 / 富士市）



長塚古墳／沼津市

※ モノクロ写真は昭和 31 年の発掘調査時のもの

昭和 31 年に発掘調査が行われ、６世紀前半に築かれた前方後円墳であることが確認されました。後円部の中心部分は盗掘を受けていましたが、周囲から埴輪が出土しています。沼津市内に築かれた最後の前方後円墳です。

5-1　愛鷹山の群集墳と地域開発

愛鷹山の群集墳

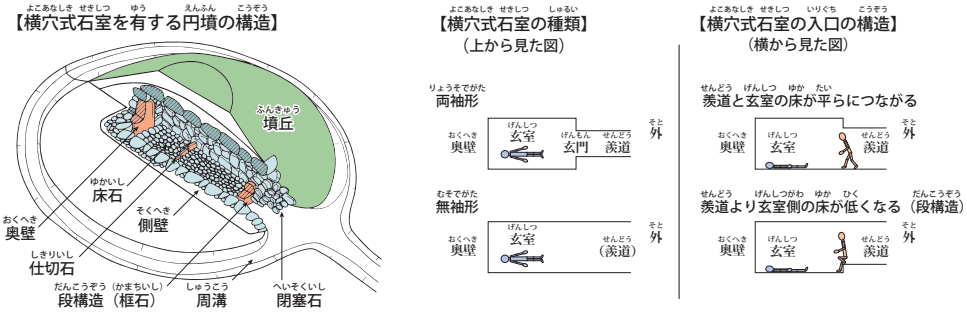
６世紀後半以降、駿河・伊豆地域で前方後円墳が造られなくなると、横穴式石室を備えた小型の古墳が愛鷹山麓や富士山麓などに密集して築かれるようになります。群集墳の時代の到来です。西は赤淵川、東は桃沢川に挟まれた愛鷹山南麓には、少なくとも 1,000 基以上の古墳が築かれたとみられますが、南西部の須津（中里・神谷）・船津・石川の三大古墳群に 600 基以上が集中しています。群集墳の時代には、この地域全体を統一するような突出した首長墳が見当たらないことから、尾根筋や谷といった墓域を共有する古墳群単位で、それぞれの集団を率いるリーダーが登場したと考えられます。彼らは噴火によって疲弊していたこの地域を開発することで、新たな産業を興していったことが、最新の調査によって明らかになってきました。

船津古墳群／富士市　　石川古墳群／沼津市　　芝荒２・３号墳／沼津市

赤色立体地図提供：小林淳（静岡県富士山世界遺産センター）・国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所
地形図：国土地理院発行　電子地形図 25000

愛鷹山麓に築かれた古墳の特徴

７世紀以降に愛鷹山に築かれた古墳は、数こそ多いものの、一つ一つは最大でも直径 10 m程度と小規模です。
墳丘内には横から被葬者を埋葬する横穴式石室が造られていて、この中には箱形の石棺を伴うものも認められます。
この地域の石室は平面的には玄室と羨道の区別が明瞭でない無袖形が大半です。



5-1　愛鷹山の群集墳と地域開発

須津古墳群／富士市

須津古墳群は、須津川周辺の中里・神谷・増川地区に築かれた約 200 基の古墳によって構成されます。なかでも、7 世紀中頃に築かれた千人塚古墳（富士市指定史跡）は、愛鷹山麓では最大級の全長約 11 m、高さ 2 m以上を測る大型の横穴式石室から、金銅装馬具や刀装具などの副葬品が出土しています。このほかにも、金銅装圭頭大刀が出土した中里 K-95 号墳（中里大久保古墳）や、銅鋺が出土した中里 K-79 号墳（道東古墳）など、愛鷹山の古墳群の指導者層を考える上で重要な古墳が集中しています。

千人塚古墳の石室と遺物出土状況

5-2　愛鷹山麓の開拓者たちの素顔

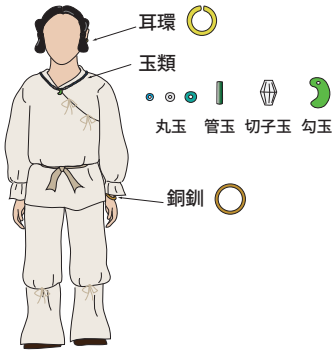
開拓指導者の装い

古墳の被葬者は武器を持って権威を示したほか、様々な装飾品で自身や馬などを飾りました。群集墳のリーダーたちは、金色に輝く耳環や希少な鈴付のアクセサリー、渡来人との関わりが想定される銅釧、様々な素材で作られた色とりどりの玉類などを身に付けたほか、伝統的な権威の象徴である銅鏡を有する者もいました。

豊富な玉類

数多く出土する装飾品の中でも玉類は、形や素材が様々です。形としては丸玉、細長い管玉、切子玉、勾玉などがあり、その素材は、ガラス製、メノウ、水晶などの石製が一般的ですが、珍しいものでは天然樹脂の琥珀製や貝製もあります。

船津 L-207 号墳の玉類出土状況

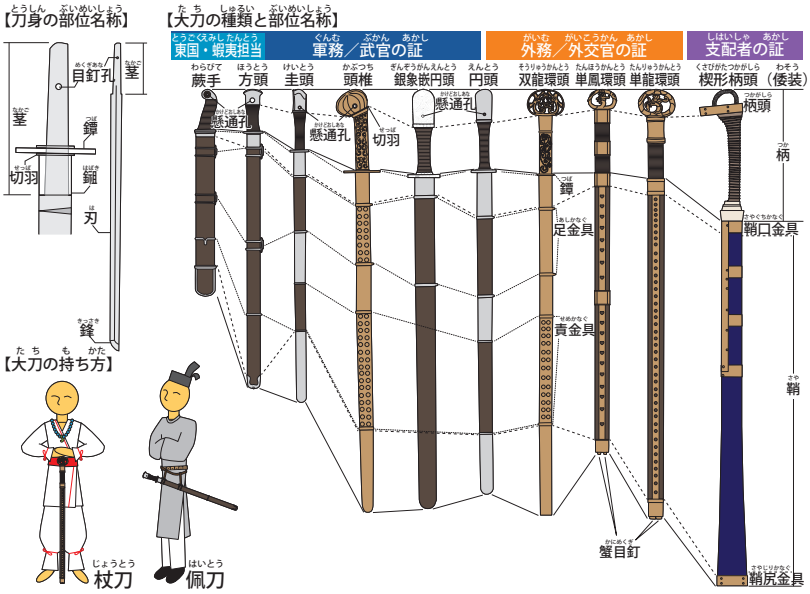


武人として

古墳の副葬品でとりわけ目を引くのが武器類です。金銅や銀などで美しく装飾が施された大刀をはじめ、鉄鏃、弓金具などが出土します。また防具である籠手が納められた例もあります。こうした武器は、愛鷹山麓の集団の武人的な性格を反映していると考えられます。

権威や職掌を示す大刀

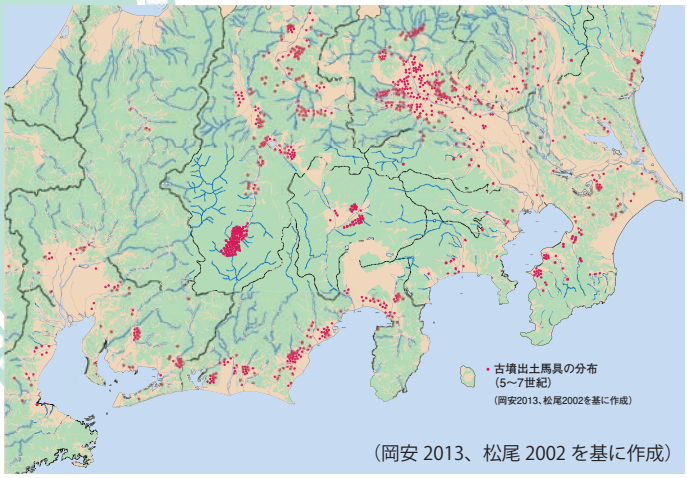
群集墳の時代の装飾付大刀は、その保有者の権威を示したほか、集団内部でその人物が得意としていた役割（職掌）を表現したとも考えられています。芝荒２号墳や井出二ツ塚古墳の鳳凰をあしらった大刀は外交官的な人物像、花川戸４号墳の鮮やかな銀装の圭頭大刀は武官的な人物像が想定されます。各種の装飾付大刀は倭王権を構成する有力氏族の工房によって製作され、配布元の氏族が王権内で担った役割（職掌）が、配布先の地方の有力者にも期待されていたとみられます。



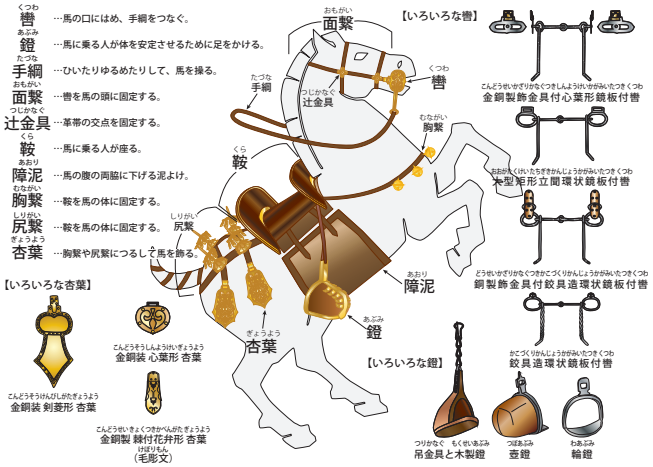
5-2 愛鷹山麓の開拓者たちの素顔

交通網の管理と牧の経営

愛鷹山の古墳群からは馬具も豊富に出土します。馬は５世紀頃に朝鮮半島からもたらされ、軍用のほか、陸上交通を担う動物として重宝されました。愛鷹山麓周辺に集中する馬具は、この地域の集団が陸上交通網の管理やそこで利用する馬の飼育をおこなっていたことを示す重要な資料です。

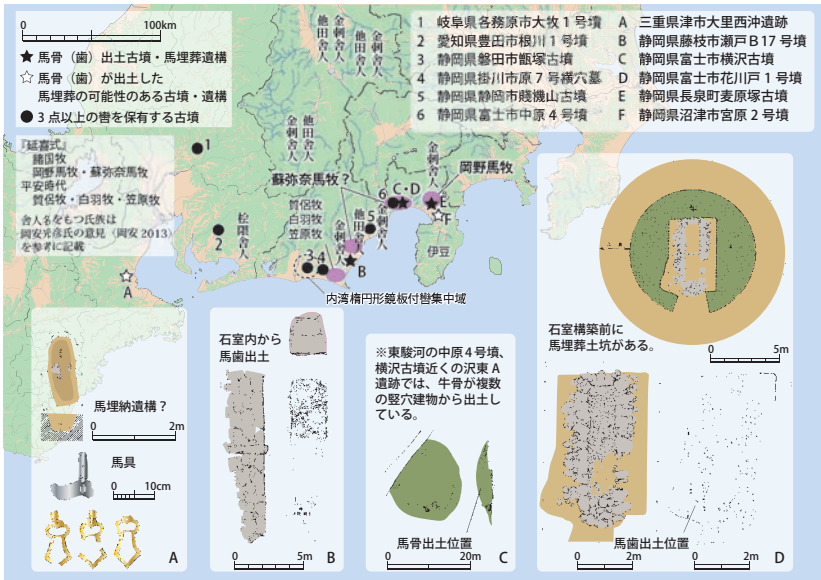


（岡安 2013、松尾 2002 を基に作成）



馬具の出土古墳から交通路を復元する

古墳時代の馬具は、必ずしもどの地域でも広くみられるわけではありません。古墳出土馬具の分布をみると、現在の長野県や群馬県に最も集中し、続いて静岡県や山梨県、千葉県に多いことがわかります。前者の分布域は後の東山道、後者は後の東海道の沿線に相当することから、後に駅伝制として体系化された交通・通信網の原型が、この時代に整備され始めたと考えられています。



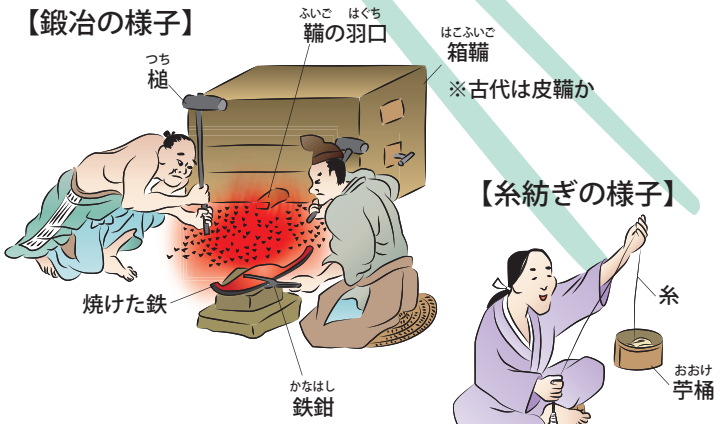
東海地方における牧関連遺跡の分布（※大谷宏治作成の原図を基に再構成）

5-2　愛鷹山麓の開拓者たちの素顔

土木開発と殖産興業

土木・手工業生産に関連する道具も愛鷹山麓の古墳群に副葬されることから、古墳の主たちの中に、土木開発や手工業生産に携わる技術者や、彼らを束ねるリーダーがいたと考えられます。

彼らは愛鷹山麓に広大な墓域や牧を切り開いたほか、浮島沼を挟んで対岸に位置する田子の浦砂丘上に、手工業生産の拠点となる大集落群を創出しました。



道具の主な使用目的
鎌・刀子・ヤリガンナ：山林開発・木材加工
紡錘車・針：製糸・布織物生産
鍛冶具・砥石：小鍛冶・鉄器製作

※中世の絵画資料を基に作成。

的場３号墳／沼津市

的場３号墳は、新東名高速道路建設工事に伴って発掘調査された古墳です。石室は全長6.3ｍと、特段大きなものではありませんが、武器や装飾品のほか、静岡県初の発見となった鉄鐸が出土しました。鉄鐸は、朝鮮半島から渡来した鉄器製作集団の儀礼的な装身具とされるものであり、古墳の主は渡来系の職人もしくは彼らを束ねるリーダーと考えられます。

的場３号墳の横穴式石室
（静岡県埋蔵文化財センター提供）

中原４号墳と土木・手工業関連製品／富士市

中原４号墳は、富士山南麓に６世紀後半に築かれた径11ｍの円墳です。農工具や鍛冶具、生産用具が多数副葬された状況から、この古墳の主は、土木開発や農業･林業、布・皮生産、鉄器生産に携わる渡来人を含む技術者集団を多数率いた、「富士山麓の開発王」であったと評価されています。

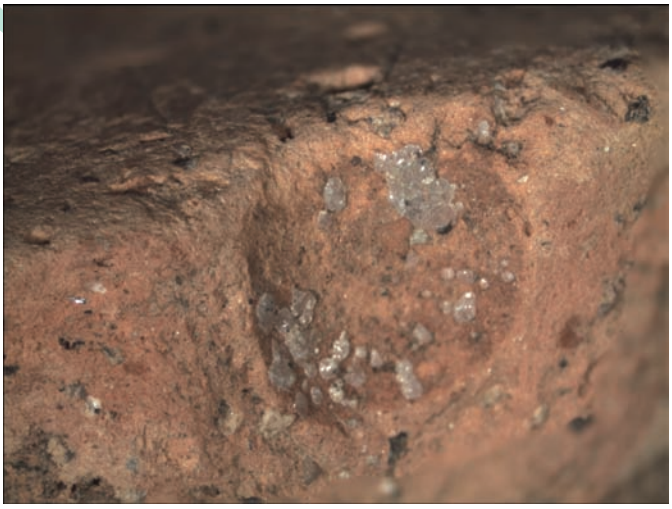
このような指導者が、愛鷹山の古墳群の集団と共同でプロジェクトを実施していた可能性も十分に考えられます。

中原４号墳の横穴式石室と農工具

5-2 愛鷹山麓の開拓者たちの素顔

中原遺跡／沼津市

中原遺跡は、石川古墳群と浮島沼を挟んだ田子の浦砂丘上に拓かれ、これまでの調査で200軒を超える竪穴住居が発見された集落です。愛鷹山麓の古墳群と同様、７世紀が集落の最盛期であり、遺跡からは手工業関連製品として砥石や紡錘車、鉄鉗などの鍛冶具のほか、古墳にも納められたであろう大量の鉄製品、そして全国的にも極めて珍しいガラス小玉を作るための鋳型が出土しました。また釣針や土錘などの漁具や海産物の加工用の鍋もあり、複合的な生産・加工の拠点集落と考えられます。



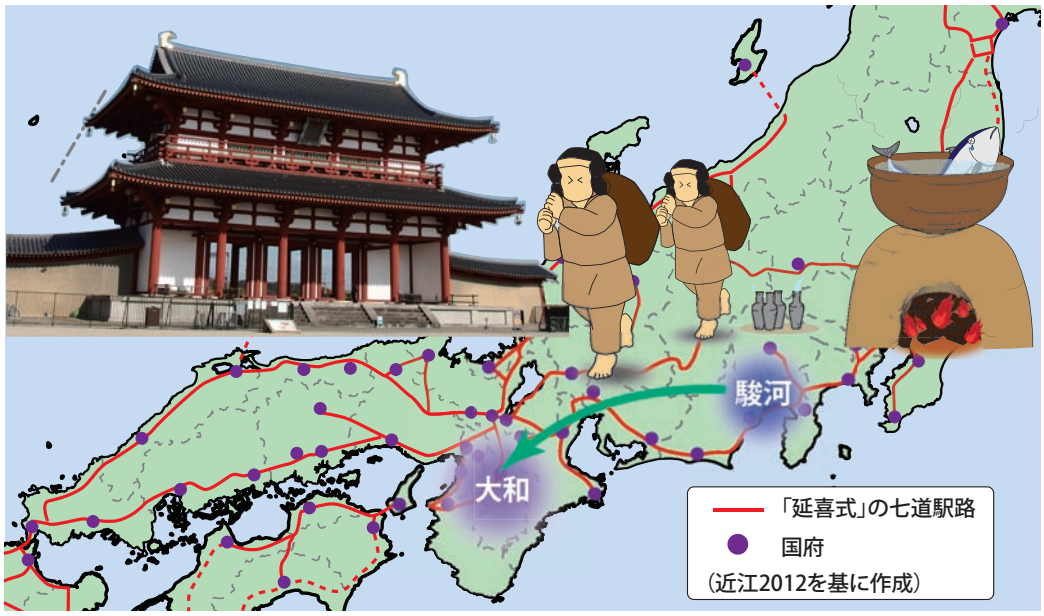
中原遺跡の発掘調査状況とガラス小玉鋳型の拡大写真

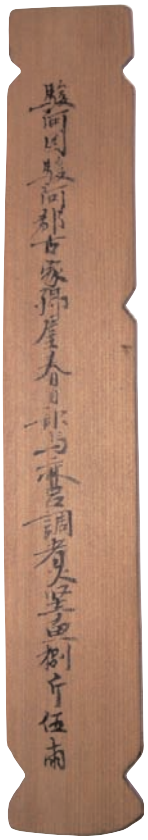
5-2　愛鷹山麓の開拓者たちの素顔

水産加工と王権への貢納

中原遺跡では、７世紀代より鉄製釣針や大型土錘などの漁具のほか、回遊性魚類の煮炊き用と考えられる土師器の堝が多数出土しています。駿河・伊豆国では、奈良時代以降に平城京へ調として、堅魚製品（カツオ節や魚醤などの調味料）を貢納していたことが木簡などから判明していますが、中原遺跡の調査により、その原初的な活動が７世紀までさかのぼる可能性が出てきました。

『日本書紀』に登場する稚贄屯倉は、現在の田子の浦港から沼川周辺に７世紀前半頃に設置された、上宮王家（聖徳太子の一族）への堅魚製品の貢納拠点とみる説が有力であり、中原遺跡の特徴と共通します。愛鷹山麓の古墳群の集団の出自やその役割の一端を考える上で、古墳群の対岸に位置する中原遺跡の調査成果は今後も注目されます。





駿河国駿河郡古家郷戸主春日部与麻呂調煮堅魚捌斤伍両

平城宮跡出土木簡（複製）

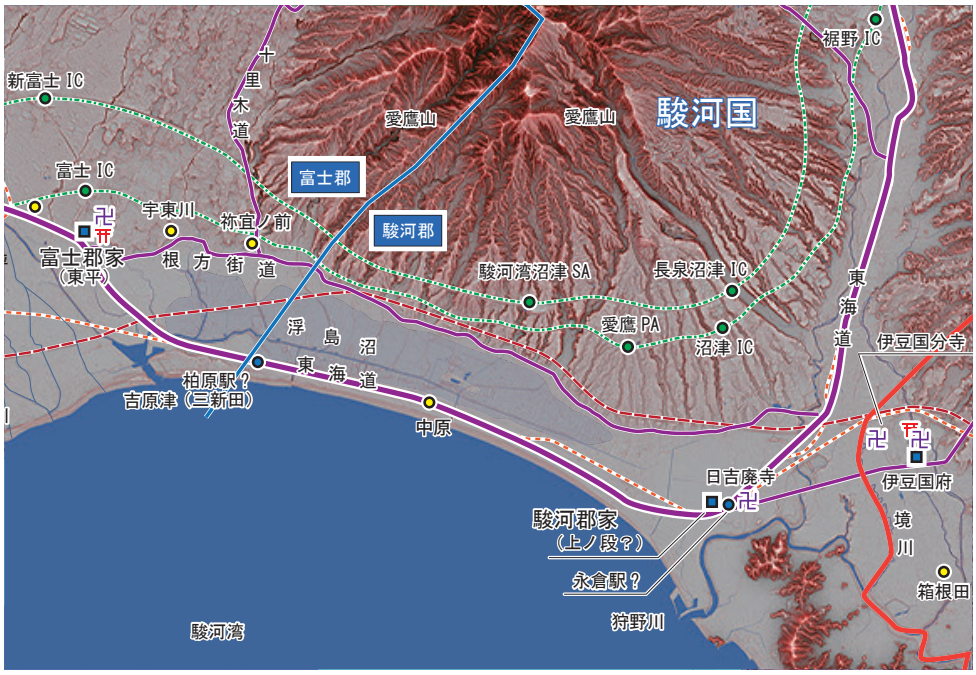
「駿河国駿河郡」の「春日部与麻呂」が、税（調）として「煮堅魚」（煮たカツオを天日干ししたものか）を納めたことが記されています。

6　愛鷹山から、駿河・富士へ

奈良時代の古墳と集落

６世紀後半から７世紀にかけて 1,000 基以上築かれた愛鷹山麓の古墳群は、８世紀になると急激に築造数を減じていきます。かろうじて造られる古墳はそれ以前とは様相が変わって、仏教的要素が濃厚な「墓」となり、墓域を大きく変えたり、横穴式石室を小型化したりするようになりました。

集落は、愛鷹山麓の南側の砂丘上に大規模に広がっていた中原遺跡が衰退を始め、代わって現在の沼津・富士の中心市街地周辺に巨大な集落や寺院が形成されていきます。愛鷹山麓周辺で先鞭が付けられた古代の地域開発は、狩野川北岸や富士川東岸にその主たる舞台を移すことで、現在につながる市街地の原型が誕生したのです。



愛鷹山南麓周辺の古代景観

6　愛鷹山から、駿河・富士へ

古代駿河郡の古墳と集落

清水柳北１号墳はこれまでの古墳群の密集地帯から離れ、現在の沼津市の工業団地内に立地します。全国的にも珍しい上円下方墳で、内部に火葬骨を納めた石櫃が納められました。また大岡の宮下古墳からは仏具の銅鋺が、香貫の宮原１号墳からは取手付きの硯が出土しており、いずれも仏教と法によって社会を治める律令制度と深く関わる遺物です。

集落は沼津駅周辺の上ノ段遺跡周辺に駿河郡家（郡の役所）が設置され、近接して駿河国最古級の仏教寺院・日吉廃寺が造営されました。

沼津市中心市街地周辺に広がる奈良時代の重要遺跡

宮原１号墳出土硯／沼津市
※東京国立博物館蔵
ColBase (https://colbase.nich.go.jp

文字を書く文官のイメージ

③上ノ段遺跡／沼津市

①清水柳北１号墳／沼津市

④日吉廃寺塔跡／沼津市

②下石田原田遺跡／沼津市

6　愛鷹山から、駿河・富士へ

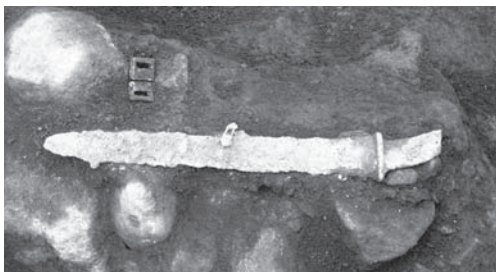
古代富士郡の古墳と集落

富士市域では、伝法地区などの一部において８世紀にも古墳が築かれます。西平１号墳は律令制における役人が使用する腰帯具などが出土しており、古墳の主は富士郡の長官（大領）クラスと考えられます。

集落は富士川東岸の東平遺跡が急速に成長を遂げ、富士郡家（郡の役所）関連とみられる租税を保管する倉庫や大型の官舎群が見つかっています。また、現在の富知六所浅間神社周辺には、富士郡初の仏教寺院である三日市廃寺が創建されました。

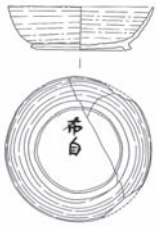
富士市中心市街地周辺に広がる奈良時代の重要遺跡

①西平１号墳／富士市



①西平１号墳遺物出土状況／富士市

②東平遺跡の郡家関連倉庫群／富士市
（西富士道路起点）



東平遺跡出土「布自」墨書土器
／富士市
（富士リハビリテーション専門学校）

（参考）東平遺跡復元倉庫／富士市
（広見公園）

②東平遺跡／富士市（ＡＢホテル）

②東平遺跡／富士市（伝法小学校）

エピローグ

旧石器時代以降、人々は時代ごとに様々な形で、愛鷹山やその南麓に広がる浮島沼、河川、駿河湾のもたらすめぐみを利用してきたことがわかります。

厳しい寒冷期の旧石器時代において、安住の地を求めて温暖な気候であった愛鷹山にたどり着いた人々は、環境や社会情勢の変化に伴い、道具の形状や素材、集落の場所や形態を変えながら生活してきました。そして、富士山噴火の影響を受けた愛鷹山麓周辺の再興の過程で培われた技術が、現在の富士・沼津両市の生活圏の原型を作り出したといえるでしょう。

現在、富士・沼津両市でおこなわれている自然利用や地域開発などの源流は、愛鷹山麓周辺で暮らした人々の生存戦略に端を発していることを感じていただければ幸いです。

謝　辞

本展開催にあたりましては、所蔵者の皆さまをはじめ、関係各機関から多大なる御協力を賜りました。

ここにご芳名を記し、あらためまして深く感謝申し上げます。

（敬称略・五十音順）

＜個人の皆さま＞
石井　礼子
菊池　吉修
滝沢　誠

＜関係機関の皆さま＞
国立歴史民俗博物館
静岡県埋蔵文化財センター
東京国立博物館
鳥取県とっとり弥生の王国推進課

令和３年９月18日
富士山かぐや姫ミュージアム
沼津市教育委員会

富士山かぐや姫ミュージアム　秋のテーマ展
令和３年度 沼津市・富士市連携埋蔵文化財活用特別展示事業

愛鷹山と生きる
原始・古代の生存戦略

展示解説図像集

発行年月日　2021年９月18日

発行　富士山かぐや姫ミュージアム
沼津市文化振興課

編集　富士市文化振興課